味覚形容詞「甘い」と sweet
－「甘い」の対義的転用－

木　原　美樹子

The Japanese Adjective ‘amai’ and the English Adjective ‘sweet’ : Antonymous Transfer of ‘amai’

Minako Kihara

（2009年11月27日受理）

0．序

味覚表現は，味覚を表すだけでなく，他の感覚表現に転用されることも多い．味覚を含む５つの感覚分野（視覚・聴覚・嗅覚・味覚・触覚）を表す形容詞間には，共感覚的比喩（synaesthetic metaphor）用法が存在する．共感覚的比喩とは，「ある感覚分野のことを表現するのに別の感覚分野に属する語を比喩的に用いること」（国広1989: 28）である．共感覚的比喩が一方向的であることは，英語における Ullman（1957）や Williams（1976）の研究で指摘されている．続く日本語の共感覚的比喩についての研究も，基本的に英語と同様いわゆる「一方向性仮説」を支持している．（山梨（1988）; 国広（1989））[1] 味覚表現は，嗅覚表現や聴覚表現，視覚表現に転用される．

日本語の味覚形容詞「甘い」とその英語相当語 sweet の基本義は，「砂糖や蜜のような味」である．日本語「甘い」と 英語 sweet のどちらも，共感覚的比喩により，他の感覚に転用される．例えば，「甘い」は，「甘い香り」のように，嗅覚表現に比喩的に転用され，蜜のような心地よいにおいを表すのに用いられる．英語 sweet も同様に sweet odor のような表現が可能である．上述のような比喩の方向性が見られ，味覚表現は，聴覚表現や視覚表現にも転用される．（「甘い音楽」「甘いマスク」等.）日常生活において，あまりに定着した表現であるため，比喩的表現であることすら気づかずに使っていることが多い．日本語と英語が決定的に異なるのは，日本語では「甘い親」「甘い評価」「甘い考え」のように厳しさに欠けていること，「このねじは甘い」のように本来の機能があるべき状態より下にあることを指すのにも使われるところである．ここで「甘い」は否定的な意味で使われており，このような用法は，英語 sweet には存在しない．日本語の「甘い」には，何故「厳しさに欠ける」，「機能があるべき状態にない」などの否定的な意味があるのか．本稿では，日本語の「甘い」と英語 sweet の違い，何故「甘い」にだけ否定的な意味があるかについて，他の言語も考慮に入れながら，「甘い」と「辛い」の対義関係に注目し考察する．

1．「甘い」と sweet の意味の違い

まずは，「甘い」と sweet の意味の違いについて見る．「甘い」は『大辞泉』で以下のように定義されている[2]．

（1）甘い
1．砂糖や蜜のような味である．
2．塩気が少ない．辛くない．⟷辛い
3．口当たりが穏やかで，刺激が少ない．酒の味などにいう．「甘いワイン」⟷辛い
4．（味覚以外の感覚に転じて）
①蜜のようなにおいがする．「香水の甘い香り」
②話しぶりが巧みで，人をたぶらかすさま．うまい．「甘い言葉で誘う」
③耳に快い．「甘い声で囁く」
④男女の仲がよく，幸せそうなさま．「甘い新婚生活」

別刷請求先：木原美樹子，中村学園大学人間発達学部，　〒 814-0198　福岡市城南区別府 5-7-1
E-mail：kihara@nakamura-u.ac.jp

[1] 日本語の共感覚的比喩については一方向性が認められないという主張（酒井 2008）もあるが，挙げられている反例には使用可能性が疑われるものも含まれている．例外的なものもあるようだが，一方向的傾向はあると思われる．

[2] 一部用例は省略している .

5．①やさしすぎるさま．厳しさにかけているさま．「甘い親」
②評価の基準が厳格でない．「甘い採点」⟷辛い
③しっかりした心構えができていない．「そんな甘い考えでは世間は渡れない」
6．楽しく，快いさま．「酸いも甘いも噛み分ける」
7．物事の機能が本来あるべき状態より衰えているさま．「このナイフの切れ味は少し甘い」
8．株価の動きが鈍く低落気味だ．「甘い相場」

「甘い」の基本義は1の味覚表現であり，2，3のような意味でも使われる．4以下が味覚外の意味を表している．荻野（1996）も述べているように、大多数の日本人にとって「甘い」の対義語は，「辛い」である．それは，よく使われる次のような言語表現の存在からも妥当であると思われる．日本語では「甘口～」「辛口～」という表現がよく使われる．甘口カレー，甘口醤油，甘口ワイン，甘口の酒，甘口塩鮭，のような表現に対して，辛口カレー，辛口醤油，辛口ワイン，辛口の酒，辛口塩鮭などがある．これらは日本語において「甘い」と「辛い」の対義関係が強いことを示している。「甘い」と「辛い」の対義関係があって初めて成り立つ表現であると言える．

英語 sweet は『オックスフォード新英英辞典』（*Oxford Dictionary of English*, 2003 ）で，以下のように定義されている．

（2）sweet
1．having the pleasant taste characteristic of sugar or honey; not salty, sour, or bitter
・< of air, water, or food > fresh, pure, and untainted
・smelling pleasant like flowers or perfume; fragrant
・< of sound > melodious or harmonious
2．pleasing in general; delightful
・highly satisfying or gratifying
・working, moving, or done smoothly or easily
3．< of a person or action > pleasant and kind or thoughtful
・charming and endearing
・dear; beloved

sweet は，1の「砂糖や蜂蜜に特徴的な好ましい味」を基本義としている．1－3の全てに、「心地よい」（pleasant / pleasing）という意味が含まれている．他にも delightful, satisfying, thoughtful など，よいイメージの単語が用いられている．sweet は肯定的な意味のみである．sweet の対義語は hot ではない．対義語としては salty, sour, bitter が挙げられるが、sweet — bitter の対義関係が一番強いようである．[3] 日本語の「辛い」は唐辛子など舌や喉を強く刺激するような味と、塩気が多い味の両方に用いられる．[4] 英語には日本語の「辛い」のように，塩味と香辛料などの刺激的な味を両方とも表す語はない．英語では，塩辛いのは salty であり，香辛料からくる刺激的な味には hot が一般的である．また辛口の酒に関しては dry が使われる．英語の salty, hot, dry などの語を日本語では全て「辛い」で表す．[5]

2．先行研究と問題点

共感覚的比喩，特に日本語の「甘い」については，その特殊性から，様々な議論がなされてきた．Backhouse（1994）は「甘い」の語義において，基本義の「砂糖や蜜のような味」から進んだ意味としての「塩気が足りない様子」があると考えた。「塩気が足りない」とは，期待されるレベルまで達していないことを表しているという意味で，否定的な意味を持っていると解釈した．日本語の「甘い」の意味的拡張は「甘い香り」（sweet smells）のような方向と「辛さの不足」（tastes lacking pungency）のような方向に大きく分かれ，後者が「厳格さの不足」など「甘い」のマイナス・イメージにつながると説明した．しかしながら，（1）の語義説明にもあるように、「甘い」には「塩が少ない」という意味があり、それが文脈によって時に

[3] 孫（2000）は韓国語と日本語の味覚表現の比較対照を行っている．味覚表現を含む諺と慣用句の例から，「甘い」に対する味覚表現が日本語では「辛い」「酸い」であるのに対し，韓国語では「苦い」であると述べている．尤（2004）も，中国語「甜」の対義語は「苦」であると言う．日本語の「甘い」—「辛い」の対義関係は，特殊なものであるようだ．

[4] それらを区別するのには「塩辛い」「しょっぱい」という表現が存在し，特に塩気の辛さと香辛料の辛さを区別したいときに使うことができる．

[5] 英語で辛くないカレーに対する表現としては sweet ではなく mild が用いられる．カレーの辛さについては hot – mild という対義関係がある．

「塩が足りない」と解釈されるだけであると考えられる．（2）の語義説明にもあるように、sweet にも「塩が少ない」（not salty）の意味がある。Jantima（1999）によれば、「甘い」に相当するタイ語 / wǎan / にも「塩が少ない」という意味がある．しかし英語 sweet にもタイ語 / wǎan / にも日本語の「甘い考え」「甘い親」のような否定的拡張義はない．そうであれば，何故日本語の場合のみ，「厳格さの不足」という意味拡張があるのか説明できない．

尤（2004）も，中国語と日本語の形容詞における比喩的な表現の比較からではあるが，Backhouse（1994）と同様のことを述べている．「日本語において，『甘い』は塩気の足りない味を表すところから，物足りない状態や鋭さのない状態の比喩に転じて，このようなマイナス状態の比喩が生まれた」（113）と言う．「日本語の『甘い』は味覚においてプラスとマイナス両方のイメージがある」が「中国語の“甜”はマイナスの意味をほとんど持っていない」（98）とも指摘している．しかしながら，「甜」に「塩が少ない」の意味がないとしても、日本語と英語やタイ語の違いを説明できない．

小田（2003）は，味覚の「甘い」が抽象的な意味に適用される際のメカニズムについて，「甘いものを食べたときの，体がリラックスし，弛緩状態にある身体的な緩みと，人の好意が完全に遂行されずに緩み部分を残した状態との間に見出される類似性」によるメタファーであると述べている．感覚形容語の意味空間を「快－不快」「強－弱」の基本次元で捉え，「甘い」の多義構造分析を行っているが，日本語「甘い」に見られるマイナスの意味の解明は今後の課題としている．楠見（2005）はこれを受けて，実験から「『甘い』の基本次元は「快」であるとともに，強度が「弱い」ことで説明できる」としている．しかしながら，それは日本語と他の言語の「甘い」相当語との違い，何故日本語の「甘い」にだけ否定的な拡張義があるかの説明にはなっていない．

日本語の「甘い」と他の言語における相当語との違いはどこからくるのか．「甘い」が持つ否定抽象義には「甘い」—「辛い」という対義関係が関わっているのではないかと考える．先行研究の中で，「甘い」の多義的意味（特に否定拡張義）について，対義語との関連で考察したのは Jantima（1999）のみである．Jantima の主張は，先行研究の中で最も妥当なものであると思われる．

3．日本語「甘い」—「辛い」の対義関係

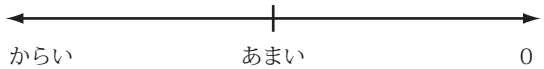
Jantima（1999）は「甘い」—「辛い」の対義関係に注目し，「甘い」の対義語化には段階性があると述べている．[6]「この日本酒はからい．しかし，あの日本酒よりはあまい．」と言えることから，「からい」によって「あまくない」こと，逆に「あまい」によって「からくない」ことを表しており，「あまい」は「からい」と「対等な対義関係」を形成していると言う．それは次のようなスケールで示される．

図１．対等な対義関係のスケール

（Jantima 1999: 146）

しかしながら，このスケールは「カレー」には当てはまらない．「日本酒はあまいものだ／からいものだ」とは言えるが，「カレーはからいものだ」とは言えても，「カレーはあまいものだ」とは言えない．カレーの場合は「からい」方が基準になっているのである．この場合，「あまい」は「からい」の「からさ」のスケールに乗っており，一元的な対義関係をもつ．Jantima はこの段階を「一元化の段階」と呼んでいる．

図２．一元化の段階のスケール



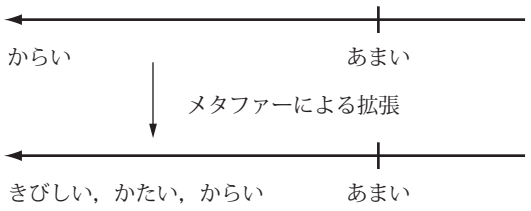
（Jantima 1999: 147）

このスケール上の「あまい」は極ではない．からさの軸上を移動する相対的な評価と捉える．「一元化の段階」は日本語に独特なものであり，この対義関係がメタファーにより味覚ドメイン外に拡張されて「考え方があまい」のような否定抽象義が出てくるとしている．図３のように「辛さ」のスケール上に乗った「甘い」は，「辛い」がメタファーにより，

[6] 対義語化には三段階があるとしているが，ここで最初の段階（段階 A）の説明は省略する．

味覚ドメイン外の「きびしい」「かたい」「からい」の意味へ拡張されることにより，それらの語と対義関係になり，否定抽象義を持つようになったという説明である．

図３．否定抽象義への拡張



（Jantima 1999: 167）

Jantima によれば，日本語の「甘い」に相当するタイ語 / wǎan / には，日本語と違って，「唐辛子のからさが少ない」という意味はなく，(i) 砂糖のような味（基本義）(ii) 塩が少ない，と定義できるということである．日本語の「甘い」に相当するタイ語の味覚ドメイン外の意義は，英語と同様，(i) 共感覚義 (ii) 肯定抽象義のみであり，日本語のような否定抽象義がない．日本語の「甘い」とそれに相当する英語やタイ語との違いは，後者には「（唐辛子のような）からさが少ない」という意味や否定抽象義が存在していないことである．英語には sweet － bitter, sweet － sour のような対義関係があるが，それらは同じスケール上の対等な対義関係ではない．日本語の文（3）は全く問題がないが，英語の文（4）は容認性が低い．

（3）これはあまい．でもあれより酸っぱい．
（4）?This one is sweet. But it's sourer than that one.

（Jantima 1999: 163）

Jantima はタイ語の場合も英語と同様であると言う．英語 sweet － sour やタイ語 /wǎan/ － /priaw/ のような対義関係は，Cruse（1986）の言う「両極対義語」であり，対称性を持たず，それぞれが独立の軸を持っている．Jantima によれば，英語 sweet － sour やタイ語 /wǎan/ － /priaw/ は，対等な対義関係をもつ日本語「甘い」—「辛い」の場合と異なり，対義語の一元化の段階に進むことができない．日本語では対義語化の最終段階で，メタファーにより否定抽象義への拡張が起こるが，英語やタイ語では「あまい」の対義語は「きびしい」「かたい」「からい」となると説明している．Jantima（1999）が「甘い」－「辛い」の対義関係に注目したことは，非常に評価できるが，問題は最後に「メタファーによる否定抽象義への拡張」と片付けてしまったところである．

語源辞典や先行研究においても，「辛い」は味覚表現が基本義であり，それが他の意味へ拡張したという捉え方が主流である（武藤（2001）他）．小学館の『日本国語大辞典』では，「からい」について，以下のように定義している．

（5）１．味覚について，舌を刺すような感じのあるさま．
①唐辛子，しょうが，わさび，山椒，胡椒などのように，舌や口をぴりぴり刺激するような感じのあるさま．
②塩の味のあるさま．しおからい．
③酸味の強いさま．
④酒気の強いさま．アルコール度の高いさま．
２．苦痛を感じて，身や心が堪えがたい感じのするさま．
①やりかた，しうちがひどく厳しいさま．
②苦しい．つらい．せつない．悲痛だ．
③気にくわない．いやだ．
④苦痛を感じるほどはなはだしい．堪えがたいほどにひどい．
⑤もう少しでだめなところだ．あぶない．あやうい．

「からい」の語源については，諸説が存在する．『日本語源大辞典』では，「からし」は，もともと塩の味を表す語で「あまし」の対義語，塩味にも当てはまるが，「舌をさすような鋭い味覚の辛み」を形容する例が平安時代頃から見られる，と記述されている．[7] 吉田金彦の『語源辞典　形容詞編』も「激しい味覚から痛く身に感ずるの意にも及んだ」としている．しかしながら，（5）の２－①に挙げられている用例も，１－①の用例と同じくらい古いものである．清水秀晃の『日本語語源辞典』は，からし［辛］の項に，他と異なる説（6）を挙げている．

[7]　６つの語源説を挙げており，①ケイラシ（気苛）の略転（大言海），②喉のカ（嗄）ルル如き苦しい状態から，などがある．

(6)「支ら・し」漢語の支の字義は，ささえたもつ，もちこたえるの意．カラシは身に激しくひびくことに対してこらえ忍ぶことが原義で，辛くして－かろうじての用法がこれである．激しく舌を刺す味覚の意にも転用する．

清水は，味覚表現を後出と考えている．「辛い」の意味を捉えるのに，(5) の 1 と 2 のどちらが拡張的意味かということを必ずしも決定する必要はない．籾山（2001）は多義語分析の課題として，(1) 複数の意味の認定，(2) プロトタイプ的意味の認定，(3) 複数の意味の相互関係の明示を挙げている．「甘い」と「辛い」の多義構造について論じた武藤（2001）の分析も，基本的にそれに従っている．しかしながら，大石（2007）が指摘するように，多義構造を，全てプロトタイプ的意味からの拡張で説明する必要はない．大石は「あかし」という古語について，「明るい」と「赤い」という二つの意味を併せ持っており，どちらかの意味からどちらかの意味が派生したというようなものではなく，両方の意味を「漠然と含みながら区別をしない状態であった」と述べている．つまり「未分化な状態から分化が起こって二つの意味が派生する」と捉えている．[8] メタファー，シネクドキ，メトニミーという三種類の比喩が，多義語の複数の意味を関連づけるという従来の見方に対して，大石（2007）は意味の分析には複数の見方が可能であることを示している．

(5) の 1 と 2 の意味は「堪えがたさ」を共通の意味として持っていると考えられる．1－①は刺激の強さを共通とした，広い範囲の味覚を表している．唐辛子の辛さ，塩辛さ，わさびの辛さなどは感覚的に異なる味覚と思われるが，同じ形容詞「辛い」で表現する．[9]「辛い」が，刺激の強さを共通項とした，かなり広い範囲の味覚を含意することが，「甘い」の対義語を「辛い」一語とし，その対義関係を強固なものにしたのである．(5) の 1 の意味の味覚表現「辛い」が味覚表現「甘い」と強い対義関係の結びつきを持っているために，「甘い」はもう一つの意味 (5) の 2 に対する対義語としても使われるようになったのではないかと考えられる．[10]

4．結論

本稿では，日本語の「甘い」と英語の sweet の意味拡張についての比較を行ったが，実のところ，これは対等な比較ではない．英語 sweet に見られる意味拡張は，ある程度英語固有の特徴を持つとは言え，他の言語と比較して特段の違いがあるわけではない．sweet は自然な人間の認知のあり方に即しておよそ説明のできるものである．例えば，sweet の意味拡張として「すてきな」という意味で，sweet idea と言った場合，sweet が持つ心地よい感覚が，抽象義へと拡張されるが，この意味の広がりは他の言語にも一般に見られるものであり，認知的なメタファーの拡張によって十分説明しうるものである．従って，本論文では，日本語の「甘い」の特殊性を説明することに議論を集中させた．「甘い」と英語の sweet との比較で行ったことを「甘い」とドイツ語の süß との間で行っても，中国語の「甜」との間で行ってもほぼ同様の結論が導かれるはずである．日本語の「甘い」は，自然なメタファーの意味拡張ではない否定的な意味を持つ（例えば，「あまい親」）ため，日本語母語話者ではない外国人が日本語を学ぶ際に極めて理解しがたい特徴を備えている．「甘い」という語に厳しさの足りない様を表す日本語独特の「あまい」（「詰めがあまい」や「切れ味があまい」）の意味が出てくる過程は，これまで多くの人がメタファーの拡張によって説明しようとしてきたが，本稿で見てきた通り，どれも十分に説明しているとは言えない．つまり，先行論文のどのモデルにしても，なぜ日本語だけにそのような独特の否定的な意味が生じるのかということを十分に説明していない．例えば，「塩が足りない」ということから，否定的な「あまい」が出てくるという考えは，他の言語ではどうして同じような否定的な「あまい」という意味が出てこないかという疑問に答えることはできない．唯一，Jantima（1999）のみが，日本語の「甘い」－「辛い」の強固な対義語関係に注目し，他の研究では説明できない意味拡張を説明することに成功している．Jantima（1999）が修士論文であるためか，その後の研究者はこの論文にほとんど言及していない． Jantima の最も優れた着眼点は，「甘い」の意味の広がりをメタファーの拡張よりもむしろ，対義的拡張で説明しようとし

---

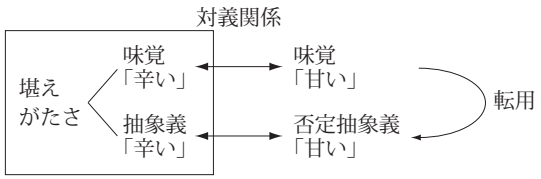
[8] 大石（2007）によれば，「明るい」が用いられるのは近世以降である．

[9] 英語であれば，hot, salty, spicy 等で区別される．

[10] 「辛い」には他の言語における相当語にはない特徴がある．「辛い」には「からい」と「つらい」の二つの読みがある．「つらい」の意味は「からい」の味覚以外の意味とほぼ一致する．

たことである．本稿は，先行研究を十分に検討し，日本語の特異性を説明するときに，もっとも説得力のあるモデルは Jantima のものであるという見解に立ち，これをさらに一歩推し進めようとしたものである．Jantima のモデルに欠けているのは，「辛い」と「甘い」の対義関係から心理的な意味での「厳しさ」「つらさ」の対義語として否定的な「あまい」が出てくる過程を「メタファーによる拡張」としたことである．このモデルでは，結局のところ，間接的であるにせよ，他の論同様，味覚の「甘い」から否定的な「あまい」が出てくることになってしまう．ここで明確にしておかなければならないのは，味覚の「甘い」とゆるさを表す「あまい」には意味的に断絶があるということである．味覚からの拡張でゆるさを表す「あまい」を導きだそうとするいかなる試みも，それがなぜ日本語だけに生じるのかということを説明できないということは再度強調しておきたい．ここで提案するモデルは，味覚の「辛い」と味覚の「甘い」の間にある極めて強固な対義関係を基に，「甘い」の否定的抽象義を捉えようとしたものである（図４）．

図４．



他の言語では「甘い」の対義語は複数あり，「味覚の『甘い』に当たる語の対義語は何ですか」という問いに対して，インフォーマントの答えは必ずしも同じではない．一方，日本語母語話者にとって「甘い」の対義語が「辛い」であることはあまりにも明確である．「酸いも甘いも」といった慣用句において「辛い」以外の対義関係が見られるが，これはむしろ例外と見て良い． Jantima は，味覚「辛い」―「甘い」から，抽象義の「きびしい，かたい，からい」―「あまい」（厳しさが足りない）の意味が拡張されたと主張し，一般の語源辞典でも，基本的に味覚の「辛い」→厳しさの「辛い」という方向を取り上げている．しかしながら，味覚の「辛し」も，厳しさを表す「辛し」も同様に古い語であり，清水の『日本語語源辞典』（1984）などは，むしろ厳しさを表す「辛し」が味覚の「辛し」に転用されたと見る．「辛い」の語源には諸説あり，いずれかに断定することは困難であるが，「辛い」の中心にある概念は「堪えがたさ」であると言える．このように捉えると，日本語の「辛い」が他の言語に見られないような，極めて広範囲の意味の広がりを持つということをうまく説明できる．塩が強く効いている場合も，からしが強く効いている場合も，わさびのような鼻にツンとくるような味覚も，みな「辛い」で表すことができるが、それはある特定の味を表すのではなく，舌に堪えがたい感覚を表しているのである．「堪えがたさ」が味覚に用いられた場合それは味覚の「辛い」となり，心的な意味に用いられた場合には厳しさを表す「辛い」となる．上記のモデルは，もともと未分化の状態で「堪えがたさ」を表す「辛い」が分化して味覚の「辛い」，心的厳しさを表す「辛い」が生じたという仮定に基づいている．ここで重要になるのが，味覚の「甘い」―「辛い」の強固な対義関係である．この対義関係がいつから定着したかは定かではない．かなり古くからあったことは知られているが，初めからあったわけではない．何らかの理由で，[11]「甘い」―「辛い」の強固な対義関係が味覚の領域で成立した．この対義関係は，「辛い」のもう一つの領域である心的な厳しさを表す「辛い」にも拡張されたに違いない．これは「メタファーによる拡張」ではない．一方の「辛い」に成立している対義関係が，もう一つの「辛い」の対義語を作り出したと考えられる．味覚「辛い」の対義語は味覚「甘い」である．一方，心的な厳しさを表す「辛い」の対義語はもともと存在していない．それは「厳しくない」と言う他はないのであるが，この意味の空白を味覚の対義語である「甘い」が埋めたということである．

[11] ここでは，その理由がどうであれ，事実として味覚領域で「辛い」―「甘い」が強固な対義語として成立したということが重要であるが，私見を述べるならば，およそ以下のようになる．「堪えがたさ」という広範囲の意味の広がりをもつ「からし」は，もともと特定の味覚を表す語ではなかったので，他の言語では、別の語で表される強い刺激を持つ味覚の広い範囲を意味する語となった．日本語の辛い（味覚）の意味は英語で言うなら，hot, salty, spicy と言った語のすべての領域に及んでいる．したがって，特定の味覚を表す語よりも，「甘い」の対義語として当てはまる場合が多く，このことが日本語における味覚「辛い」―「甘い」の強固な対義関係を成立させた要因となったのではないだろうか．

参考文献

青谷法子（2001）「多義語の語彙ネットワークに関する研究（1）－形容詞『甘い』について－」『東海学園大学研究紀要』第６号，pp.149-158.

大石亨（2007）「日本語形容詞の意味拡張をもたらす認知機構について」『日本認知言語学会論文集７』, pp.160-170.

荻野綱男（1996）「文化の多様化と語彙の多様化」『国文学』41-9, 学燈社 pp.59-63.

小田希望（2003）「甘くてスウィート」『ことばは味を超える』瀬戸賢一編著　海鳴社　pp.186-214.

楠見孝（2005）「心で味わう／味覚表現を支える認知のしくみ」『味ことばの世界』瀬戸賢一他　海鳴社　pp.88-122.

国広哲弥（1989）「五感を表す語彙—感覚的比喩体系」『言語』第18巻第11号，pp.8-31.

酒井彩加（2008）「『「共感覚的比喩」の一方向性仮説』における反例の検証と課題」『琉球大学留学生センター紀要』第５号，pp.1-18.

孫京鎬（2000）「日韓両国語における味覚表現の対象」『社会環境研究』第５号，pp.45-54.

武藤彩加（2001）「味覚形容詞『甘い』と『辛い』の多義構造」『日本語教育』第110号，pp.42-51.

籾山洋介（2001）「多義語の複数の意味を統括するモデルと比喩」『認知言語学論考』No.1 山梨正明他編　ひつじ書房　pp.29-58.

山梨正明（1988）『比喩と理解』東京大学出版会

尤 東旭（2004）『中日の形容詞における比喩的表現の対照研究』白帝社

Backhouse, A. E.（1994）*The Lexical Field of Taste: A Semantic Study of Japanese Tasteterms.* Cambridge: Cambridge University Press.

Cruse, D. A.（1986）*Lexical Semantics.* Cambridge: Cambridge University Press.

Jantima, Jantra（1999）「日本語形容詞『あまい』の意味拡張と広告における多義的使用の分析」『DYNAMIS』3: 142-193.

Ullmann, S.（1957）*Principles of semantics.* London: Blackwell.

Williams, J. M.（1976）“Syneasthetic Adjectives: A Possible Law of Semantic Change,” *Language* 52: 461-478.

清水秀晃（1984）『日本語語源辞典／日本語の誕生』現代出版

前田富祺（2005）『日本語源大辞典』小学館

吉田金彦（2000）『語源辞典・形容詞編』東京堂出版

『日本国語大辞典』（1975）　小学館

『大辞泉』（1998）　小学館

Oxford Dictionary of English（2003）Oxford: Oxford University Press.